

障がいのある子どもの保護者支援

—ムーブメント教育による支援教室での実践を通して—

○ 飯村 敦子

(鎌倉女子大学児童学部)

KEY WORDS: ムーブメント教育 障がい児 保護者支援

【目的】

障がいのある子どもの保護者は、子どものできないことや遅れていることに目を向けてしまいがちである。子どものマイナス面に目を向けている状況は、子育てに喜びを見いだしたり、自信をもったりすることが困難である。黒川(2011)は、支援者が喜びをもって保護者に子どもの変化を伝えることで、保護者は、その姿に後押しされるようにしてわが子の育ちを実感し、子どもを見つめる目を養うことができると述べた。

近年、ムーブメント教育による障がいのある子どもへの支援は、特別支援学校や療育機関などの枠組みを超え「長期にわたる継続的な支援を地域で」という保護者のニーズに応えて、多様な取り組みが行われている。その多くは、障がいのある子どもと保護者が共に参加できる教室やサークルなどの形式で行われている(小林他,2014)。このようなムーブメント教室やサークルは、保護者支援の役割を十分に果たすことのできる場であると考えられる。

本研究の目的は、障がいのある子どもと保護者のためのムーブメント教育による支援教室での実践を通して、保護者支援としての意義を明らかにすることである。

【方法】

ムーブメント教育による支援教室における子どもとの関わりの中で気づいた点について、教室終了後にスタッフ 11 名による記述データを作成した。加えて、教室の映像記録から、子どものよかった所やできたことを中心にデータをまとめた。これらのデータをもとに保護者への文書を作成した。対象は、2016年4月と6月の教室に参加した4歳から21歳の障がいのある子ども27名(うち2名はきょうだい児)の保護者26名である。保護者への文書の内容は、子どもの氏名、4月と6月のムーブメント教室のプログラム概要、それに対応した子どもとの関わりの中で気づいた点で構成されている。

この文書を見て、保護者がどのように感じたかを明らかにするために質問紙による調査を行った。調査の内容は、回答者の氏名、子どもとの関わりの中で気づいた点を記録した文書を見てどのように感じたか、子どものよかったところやできたことを振り返ることに意味があると思うか、子どもの姿を記録して保護者に伝えることについてどう思うか、文書の内容に新たな子どもの姿(発見)や心に残る記述はあったかの4点である。なお、対象の保護者には、本研究の趣旨、倫理的配慮について説明した上で、調査協力への同意を得た。

【結果】

質問紙による調査を行った26名の保護者のうち、17名から回答を得た。以下、質問ごとに結果を述べる。
○質問1: お子さんとの関わりの中で気づいた点を記録した文書の内容をご覧になってどのように感じられましたか。
○結果: とてもよかった(6名)、よかった(10名)、特に何も感じなかった(0名)、不愉快だった(1名)であった。さらに、「とてもよかった・よかった」の理由について自由記述により回答を得た。その内容を分析したところ、当時のことを思い出すことができた(4名)、表情や感情、仕草などをくみ取っていた/子どもの気持ちを代弁しているようだった(4名)、親が気づけなかったことを知ることができた(3名)、その他(7名)であった。一方「不愉快だった」と

回答した1名の理由は、活動に上手く乗れていないこと(参加できていないこと)を思い知らされる、親がよかったと感じたことが書かれていないとがっかりするであった。

○質問2: お子さんのよいところやできたことを振り返ることに意味があると思いますか。

○結果: 意味がある(16名)、ない(0名)、どちらとも言えない(1名)であった。さらに「ある」の理由について自由記述により回答を得た。その内容を分析したところ、次へのステップにつながる(8名)、成長を期待できる(5名)、子どもを誉めるきっかけになる(3名)、その他(5名)であった。どちらとも言えないと回答した1名の理由は未記入であった。

○質問3: 今回のようにお子さんの姿を記録して保護者の皆様にお渡しすることについてどう思いますか。

○結果: よいと思う(17名)、よいと思わない/どちらとも言えない(0名)であった。さらに「よいと思う」の理由について自由記述により回答を得た。その内容を分析したところ、親とは違う第三者の客観的な意見が嬉しい(13名)、気づけなかったことに気づくことができる(6名)、子どもの成長に気づくことができる(4名)、その他(5名)であった。

○質問4: 記録した文書の内容に新たなお子さんの姿(発見)や心に残った記述はありましたか。

○結果: あった(14名)、なかった(3名)であった。さらに「あった」と回答した場合には、その箇所を指摘した上で、それに対する自身の感想を記述してもらった。子どもの姿の新たな発見や心に残った記述の数は1箇所4名、2箇所5名、3箇所2名、5箇所2名、7箇所1名で、計37箇所であった。また、それぞれの感想を分析したところ、新たな気づきに関すること(10)、子どもの成長に関すること(9)、活動の内容に関連すること(7)、子どもの長所や得意なことに気づいてもらったこと(5)、子どもの様子を改めて思い出すことができたこと(2)、その他(4)であった。

【考察】

障がいのある子どもの支援は、子どものできることや得意なこと(ストレングス)に目を向け、支援につなげることが重要である。そして、保護者と支援者が子どものストレングスを共有するための具体的な方法が必要である。本研究では、ムーブメント教育による支援教室での子どもの姿を文書にして保護者に提供することを通して、保護者支援としての意義を明らかにした。多くの保護者は、この支援を通して子どもの成長を実感することが示された。特に、親が意識していなかったために気づけなかった我が子の姿を発見できたことに意義を感じる保護者が多かった。また、子どもの姿を振り返ることは次のステップにつながると期待していることも明らかになった。しかし、1名の保護者ではあるが、この支援により子どもの困難さを明確にされたと感じたことは、その背景となった要因も含めて詳細に検討する必要がある。

文献

黒川久美(2011): 障害乳幼児の親・家族支援のあり方.南九州大学人間発達研究,Vol.1, pp25-32.

小林芳文・飯村敦子・大橋さつき(2014): 発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育. 大修館書店.

(IIMURA Atsuko)